男性講座 知恵絞る時

共同参画の時代。でも乏しいノウハウ

これまで主に女性向けの活動をしていた各地の女性センターや男女共同参画センターで、男性向け講座の取り組みが始まっている。「男性も変わらなければ社会は変わらない」との思いが出発点だが、ノウハウも乏しくなかなか定着しない。ただ男性は今厳しい環境の中にあり、働き方や生き方を見直そうとする動きも出ている。その潜在的なニーズに応え、気付きが得られるような講座をどう組み立てていくか―知恵の絞り時だ。

（編集委員・石田信夫）

近年の主な男性向け講座

■松江市男女共同参画センター（プリエール）＝市民カレッジの中で「男性の生き方」「ドメスティックバイオレンス（夫婦間暴力）」など3回（04年）

■岡山県男女共同参画推進センター（ウィズセンター）＝夜間塾「男のための幸せな生き方講座」を2回（03年）

■岡山市男女共同参画社会推進センター（さんかく岡山）＝「男性ルネサンス講座」として子どもとクリスマスキャンドル作り（03年）

講師探し・参加拡大 手探り

鳥取県男女共同参画センター（よりん彩）は六月から九月にかけて三カ所で、男性を意識したトークとライブ「素敵にパートナーシップ」を開いた。講師はメンズリブフォーラム岡山世話人の市場尚文さん(五八)夫妻。

市場さんは、かつての離婚の危機に触れて「今から考えると、妻を軽くあしらおうとして、きちんと向きあっていなかった」などと擦れ違いのエピソードを話した。

その原因を探るうちに突き当たったのは「男は強くあるもの。女は従うもの」という刷り込み。「でもそれに気付いて、とらわれから自由になると、両方が楽になった」と実感を込めた。

別掲のように中国地方でも近年、こうした講座やセミナーを手掛けるセンターが現れている。

これまでセンターが目指していたのは「女性のエンパワメント」。事業も女性の学習や社会参加の後押しが中心だった。ここにきて男性を視野に入れ始めたのは、幾つかの理由がある。

役割分担の壁

まず学習して力をつけた女性が「男女役割分担の壁」に直面したことである。行政や企業など男性による意思決定に参加できず、足元の家庭でさえ、夫は「家事は妻の仕事」と怪しまない。

「いくら女性が意識を高めても男性が変わらなければ」との思いが募った。

第二に、男性の価値観を揺るがす社会の激変がある。リストラやそれに伴う労働過重。その中でうつや自殺も。いつ当事者になるか分からず、これまでの働き方を考え直す機運が男性自身に生まれようとしている。

第三に、一九九九年の男女共同参画社会基本法の施行がある。行政の側に、女性だけに肩入れするのはバランスを欠く―との意識が生まれた。

こうして始まった講座だが、実はまだ手探り状態である。例えば講師一つとってもそうだ。

「女性より男性の講師やコーディネーターの話が耳に届きやすいと思って探すが、人材がなかなか」と、広島県から女性総合センター（エソール広島）の運営を任されている県女性会議の鈴岡章子常務理事。以前は単発の講座も開いたことはあるが、後が続かない。

あるいはせっかく開いても参加者が少ないことがネックになる。「役所の内部では数で評価される。それだけに男性向け講座は二の足を踏む」とあるセンターの職員は漏らす。

全国女性会館協議会の調査によると、二〇〇一年度に二百五十八施設のうちほぼ半数が男性対象の講座を開いていた。同時に多くの館が、テーマや講師選び、手法などに悩みを抱いていることが分かった。

本音ものぞく

これに応える形で国立女性教育会館（ヌエック＝埼玉県嵐山町）が本年度、取り組みを始めたのが「男性向け学習プログラム」の開発である。

「まず中高年向けを考えている。夫婦で来て語り合えるような内容にしたい。ワークショップ形式なら参加しやすいはず」と高橋由紀研究員。ただ完成は再来年というからまだ先だ。

各センターの話を聞くと「男性講座にも取り組まなければ」と言う一方で、「本来業務は女性の支援なのだから」という意識がちらりとのぞく。

しかし団塊世代が定年を迎える〇七年問題を前に「地域・家庭弱者」として置き去りにされかねない男性のエンパワメントや、現役世代の「家庭両立」支援をしていくことは、これからの日本社会の幸せを考えていく時に欠かせない。

男性に「教える」のではなく、考えたり体を動かしていくうちに「気付く」ような講座をどう作っていくか。マーケティングの発想で男性の声をすくいながら試行錯誤をしてほしい。

心に届くキャッチコピーを

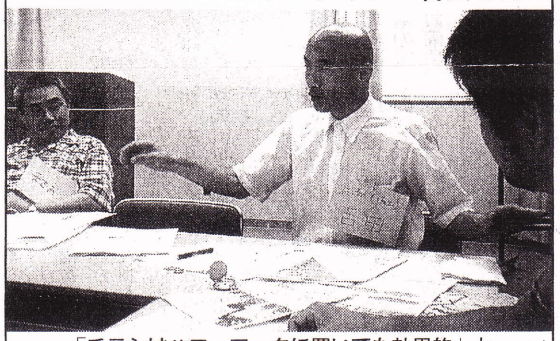
「力抜いて」「自分探し」…

フリーライター吉田さん

九月に高松市で開かれた「男のフェスティバル2004」（実行委員会主催）で「人の集まる男性講座の作り方」という分科会があった。コツを披露したのは、フリーライター吉田清彦さん(五九)＝兵庫県尼崎市＝だ。

自称「家事としての料理の達人」で生活評論家。「コマーシャルの中の男女役割を問い直す会」も主宰して、男性向け講座の講師にもよく招かれる。

吉田さんによれば、まず男性の求めているテーマで心に届くキャッチづくりをすることだ。



「チラシはハローワークに置いても効果的」と吉田さん㊥（高松市生涯学習センター）

例えば、子育て意欲が強いが仕事もきつい三十―四十代向けには「力を抜いて生きよう」「自分探し」「父と子の〇〇」など。

定年前後の五十―六十代は「会社人間から生活人間に」「地域での生活」「仲間探し」「人生の後半戦を楽しむ」などに食指が動く。どの年代も「料理」をかませると人が集まりやすい。

楽しそう、面白そう、役に立ちそう―と思ってもらえるかどうかがポイント。禁句は「啓発」。責められそう、説教されそう、怖そうと思わせるからだ。主催者はアリバイづくりに使いたがるが逆効果。

講師やコーディネーターについては、アンテナを磨いて情報のキャッチを。望ましいのは実体験を伴った楽しい話ができて、プラス思考の男性。参加者から話を引き出せる人、雇われ経験のある人も歓迎。長がつく人や、評論家は嫌われる。

受講者は男性限定にした方がいい。女性がいると男性は、構えたり、委縮したり、格好つけたりして本音が出なくなる。料理講座の場合は、女性が手を出してしまう。

連続講座ならある程度やりくりが可能な隔週がお勧め。土曜午後が集まりやすく、平日なら水曜夜。日曜は不可。

吉田さんの見立てでは男性講座は過去三回の小さいブームを経て、昨年あたりから四回目のブームの兆しという。「小泉改革の痛みが深まるとともに団塊が定年に入り、マーケットが拡大した。集まった人に仲間感覚が芽生えて、気がおけない話ができる。そんな場の快感を知れば、男は喜んでやってくる」と話す。